朝日新聞　2007年(平成19年)10月19日

私の視点

siten@asahi.com

技術士（建設部門）
佐藤（さとう）　清（きよし）

◆歩道整備

安全・快適に連続させて

週末などを利用して11年かけ、江戸五街道を数年前に歩き終えた。退職後の今春には四国八十八カ所を43日かけて巡拝した。

歴史を訪ねる目的のほかに、今日の道路で「人間の歩く空間」がどう確保・整備されているかを点検してみたかったからだ。結論から言えば、特に地方で危険な個所が随所にあり、歩道整備の遅れを痛感した。

現在、市町村道となっている旧街道や遍路道は一般的に車が少ないので、歩道がなくても気持ちよく歩ける。歴史を今日に伝える、すばらしい道もかなり残っている。

問題は、行程の半分くらいを占める車の多い国道や幹線県道である。狭くても、片側でも歩道があればまだしも、その歩道が突然なくなってしまう個所が至るところにある。特に県道では、白線の外側の幅30センチくらいの路側を、車の脅威と風圧にさらされ、命の危険を感じながら歩き、沈痛な思いをした。

日本の道路は、どうしてこんなに歩道の整備が遅れてしまったのか。

戦後、本格的な道路整備が始まったのは、昭和30年代からだ。当時は国道1号でさえ、松並木の間を縫う砂利道が残っていた。以後、自動車の急増に対処するため車道優先の整備がなされ、交通安全対策上の整備はともかくとして一般道の歩道整備は後回しとなってしまった。

ようやく昭和50年代になって歩行者への配慮がなされ、新設の道路ではほぼ歩道が設けられるようになったものの、問題は昭和30～40年代に建設された歩道のない道路が、まだかなり残っていることである。ひとたび道路が建設されると沿道に建物が建ち、用地を追加買収して歩道を設けようにも容易ではないので、今日に至っているところが多いのが実情だろう。

歩道整備にあたって大事な視点は、歩道の連続性を確保することである。

具体的には、地形的な理由で片側にしかない歩道が突然終わり、道路の反対側に歩道が移る場合の対策である。この場合、歩行者は車道を横断しなければならないが、特に道がカーブしているところでの横断は非常に危険である。こうした場所には、歩行者用押しボタン信号機などを設けてほしい。また、車道に併設した歩道にこだわらず、設置が難しい所では裏道や側道を活用して連続させることも一つの方策であろう。

一方、もう一つ重要なのは歩道の質的向上である。幅1メートル未満の歩道がかなりあるし、コンクリートブロックで仕切られただけの歩きにくい歩道もあり、しかもそこに電柱が居座るなどしている。歩道の拡幅や電柱の移設を積極的にしてほしい。さらには歩道の無いトンネルを改善し、換気装置を増強するといった歩行者への配慮も必要である。

余暇時間の拡大により、歴史街道などを長距離歩行する人が増えている。人間が「安全に、快適に、連続して歩ける道」の整備は喫緊の課題といえる。

投稿は、〒104・8011朝日新聞声・主張面「私の視点」かsiten@asahi.comへ。電子メディアにも収録します。